

IR*ゲーミング学会 ニューズレター No.34

Japan Academy of Integrated Resort & Gaming Studies Newsletter No.34

[記事]

ギャンブルと法

明暗分ける二つのカジノ類型

～アトランチックシティはどうか～

美原 融 1

G2EAsia 2017

佐々木 一彰 7

視覚障害者への囲碁普及：日本視覚障害囲碁普及会の紹介

松村 政樹 10

いってんちろくいつわりばなし

翻刻『一天地六偽咄』

高橋 浩徳 14

韓国 IR (KIR) 1号誕生とチャイナリスク、

そしてオープンカジノ

梁 亨恩 30

[掲示板]

第12回シンポジウム開催の報告

33

第14回学術大会・総会 開催日程のお知らせ

明暗分ける二つのカジノ類型 ～アトランチックシティはどうか～

ニュージャージー州アトランチックシティはニューヨークから高速道路で 3 時間、手軽な海浜リゾートとして戦前はミスアメリカページェントのイベント等で著名でもあった都市である。戦後航空機を利用したフロリダやカリビア海等でのリゾートに顧客を奪われ、急速に人気がなくなり、すたれた町となった。この町を再度活性化したのが 1976 年のカジノの導入になる。当時ニューヨークでは未だにマフィアの影があると言われていた時代でもあり、その制度の骨格たるニュージャージー州「カジノ管理法」¹は、最も厳格な仕組みを志向した制度的枠組の規範として、今日に至る迄様々な国、地域により模倣されてきた。米国東部では唯一の大都市圏に近い商業的カジノ施設がある一大リゾート地として、同市は隆盛を極めたが、2000 年代以降、近隣諸州で商業的カジノを認める動きがおこり、東部諸州はあれよ、あれよという間に 40 以上の施設が乱立する競争的市場へと変貌した。その後の不況とのダブルパンチにより、アトランチックシティのカジノ全体の GGR(総粗収益)はピーク時の 2/3 に縮小し、現在に至っている。市場が競争市場となれば、差別的優位性がない限り他州の顧客は自州の施設にいくことになり、当然客数は減少する。この結果 2014 年に 4 施設が閉鎖、2016 年に 1 施設が閉鎖し、12 あった施設は 7 施設にまで減少した²。同市を財政的に支えていたカジノ関連税収も、当然減少の一途をたどり、財政破たんが表面化、2016 年 11 月には、市の倒産を防ぐため、「州市町村安定化・健全化法」³に基づき、州政府が市政をテークオーバーし、債務調整を進めることになってしまった⁴。下記図 1 は 1978 年から 2016 年迄の同市におけるカジノ粗収益推移を現したものである⁵。

¹ Casino Control Act 1976(Updated PL2017 Ch39 & JR1 2017)

² 最も単純でないのは、全てが経済的破たんとはいえない点にある。Atlantic Club は売却の対象になり、最終的には既存の Caesars と Tropicana に分割吸収された(2014 年 1 月)。Showboat は親会社が市内にある複数ある資産を縮小し、合理化を図っただけである(2014 年 8 月)。Revel (2014 年 9 月閉鎖), Trump Plaza (2014 年 9 月閉鎖), Trump Taj Mahal (2016 年 10 月閉鎖) は、売り上げ低迷、経済的理由による破たんといえる。尚、現大統領トランプ氏はトランプカジノの命名権だけを保持しているのみで、これらカジノの所有・経営からは既に撤退している。

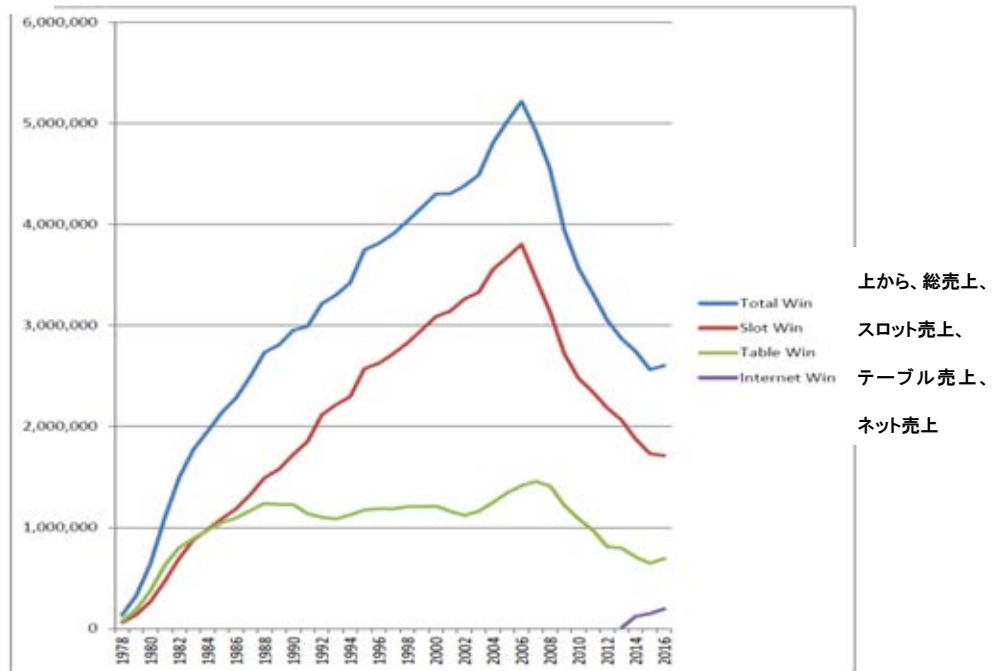
³ Municipality Stabilization and Recovery Act 2016 (Title 52, Subtitle3, Ch 27 BBBB)

⁴ 同市は人口 3 万 1000 人。市場の縮小化に伴い、カジノ関連税収は半減。2016 年時点では市の歳入欠陥が 1 億ドル、一方、過去の公債残高が 5 億ドルもあった。小規模自治体であるのに債務残高は高く、カジノ関連税収に依存する体質であったため、市の財政に致命的打撃を与えたことが実態である。

⁵ 収入のピークは 2006 年で、52.1 億ドルの総粗収益(GGR)があったが、2016 年にはこれが 23.8 億ドル迄縮小した。尚 2014 年を底とし、2016 年から直近の 2017 年第一四半期は総粗収益は回復基調にある。

図1:アトランチックシティカジノ収益推移(1978～2016 年):出所 UNLV 公表資料

単位 1000 万ドル



ニュージャージー州の制度の特色は、海浜地区に都市計画上のゾーニングを設け、ここに限り、カジノ・ホテルを誘致する前提であったことにある。当時としては極めて斬新的な考えで、単純なカジノではなく、あくまでも東部諸州随一の海浜リゾート地を実現するために、カジノ施設のライセンス申請者は、最低 500 室以上のホテルを併設し、市の魅力を顧客に提供する施設とサービスを維持し、地域を活性化することが申請の要件となった⁶。海浜リゾートを楽しみつつ、カジノを楽しむためには、宿泊施設を併設させ、連泊させることが収益増、税収増に繋がるため、ホテルリゾートの一大ハブを作ること志向したわけである。結果、ホテル+カジノ+飲食施設等を含むリゾート施設群が、有名となったボード・ウォーク⁷に連立することになった。但し、宿泊された経験のある方はご存知であろうが、ホテルにはアメニティは殆ど無く、ラグジュアリー感ゼロ、飲食施設も特色無く、泊まればよいというレベルであった。滞在することに「面白さ」が感じられないのだ。当初はそれでも顧客があり、カジノでの売り上げは年々増加の一途をたどった以上、施設の価値を向上させる更新投資や、カジノ外の顧客の満足度を向上させるアメニティ⁸等は考え

⁶ PL 1977 c.110 & Act Article5:12-27. 都市再生という特定の政策目的を実現するためにカジノ事業誘致をツールとして用いたことになり、このアプローチは様々な国、地域により模倣され、現在に至っている。我が国の IR 推進法もアプローチ的には類似的である点は興味深い。

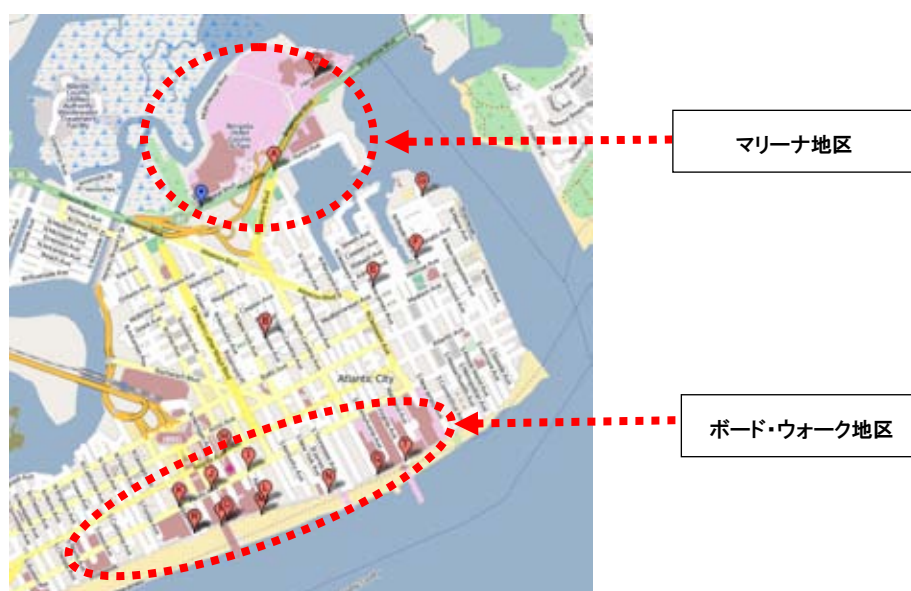
⁷ 海岸沿いに設けられた板敷の遊歩道を言う。これがこの区域内のカジノや飲食店、劇場、海岸への共通アクセスと回遊路になる。

⁸ これらボード・ウォーク地区の総売り上げに占めるカジノ部門の売り上げは同市施設の平均値をとると約 70%、非カジノ部門は 30%という比率が長年維持され、カジノ外部部門の収益は大きくない。もともと収益を生み出せるカジノ外部部門ではなかったということに尽きる。ラスベガスは全く逆になり、今や非カジノ部門の売り上げはカジノ部門を遥かに上回る。

る必要もなかったのであろう。この結果、80年代から90年代にかけて、顧客の満足度を上げる付加価値投資や更新投資はあまり実施されず、昔ながらのカジノ・ホテルが海岸沿いにあるだけといった状態になってしまった。競争がおこり、他州でより新しい魅力的な施設ができると、バスツアーでアトランチックにきていた顧客は短時間で行けるアクセスの良い自州の施設にいくようになる。顧客の離反である。

この様に、ボード・ウォーク地区のカジノ施設は活性化しているとはいいい難いのだが、これは同市のカジノ施設の一側面でしかない。ボード・ウォーク地区のカジノ施設が未だ活力を保持していた2003年に、全く異なる発想に基づくカジノ施設(Borgata)がボード・ウォークから少し離れたコンベンション施設の近くのマリーナ地区にオープンし、これが急速に人気を伸ばし、同市のカジノ収益の半分以上をこの単一施設が稼ぐようになってしまったからである。この施設の特徴は、非カジノ部門アメニティの豊かさにある。ラグジュリー感のあるホテル、ナイトクラブ、家族が楽しめる高級感のあるプールやSPA、高級レストラン、流行の最先端のファストフード、劇場、様々な会議施設等、多様な施設とコンテンツを抱えた観光にもビジネスにも対応できる統合型リゾート(IR)施設としてのカジノになる。隣接する二つのマリーナ地区カジノ施設(Harrah's, Golden Nugget)も近隣施設同士の連携により、一定数の顧客と利益を確保することに成功している。

図2:アトランチックシティー概況



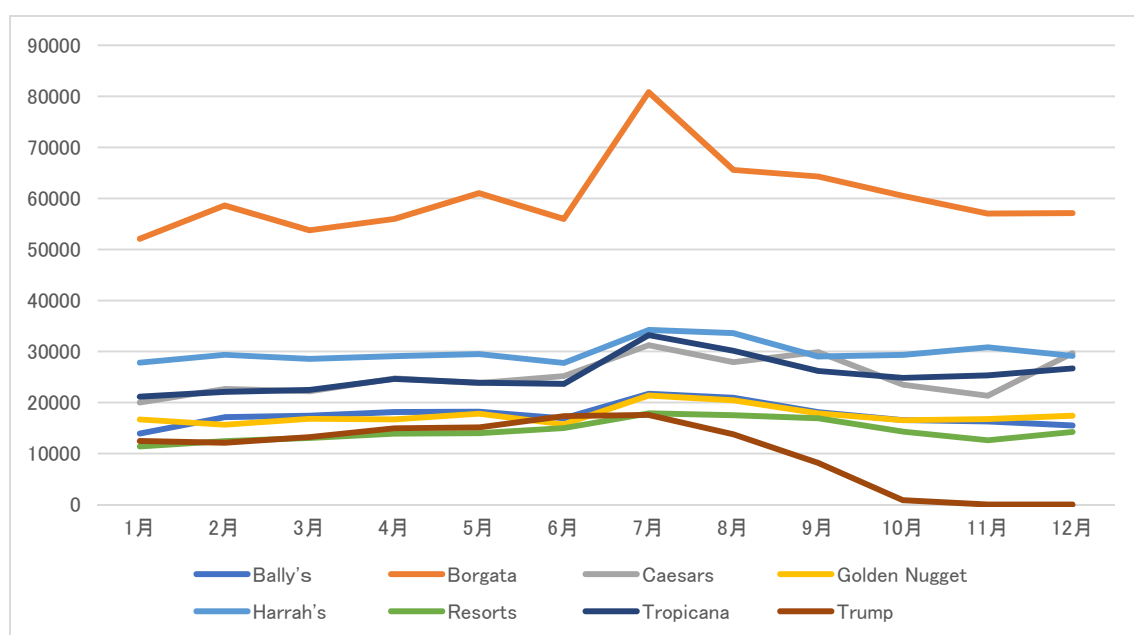
面白いことに、同じ市内にありながらこのボード・ウォーク地区とマリーナ地区との客層はかなり異なる。マリーナ地区の顧客は圧倒的に若いミレニウム世代、観光客としてのファミリー層、会議に参加するビジネスマン等になる。顧客支出単価も相対的に高く、施

設自体の対費用効果は、ボード・ウォーク地区施設を上回る。一方、ボード・ウォーク地区の主たる顧客は、ギャンブルを楽しむためだけに来訪する昔のベビー・ブーマー（現代では高齢者）が多い。実質カジノが主体となるカジノ・ホテルは高齢者、カジノ外の魅力が多い IR はミレニアム世代と、あきらかに施設の在り方が顧客層を変える状況をもたらしている。この差異が施設間の収益格差に大きな影響を与えている。

下記図 3 は 2016 年の実績レベルでのこれら両地区の 7 つの施設の GGR（総粗収益）の月別数値を比較したものである。勿論、施設規模が異なる為、単純な比較はできないのだが、明らかに、収益力のある施設と集客力・収益力の弱い施設群との二つのタイプの施設があることがわかる⁹。

図 3：2016 年事業者別 GGR 推移表(1 月－12 月)

単位：\$1000



出所：カジノ管理委員会公表資料より作成

⁹ Trump は 2016 年 10 月に閉鎖。施設単位で見ると、粗収益レベルは堅調に推移しており、供給量の減少により、相対的な安定度を取り戻していると推定できる。一方、これら施設の中で、Borgata 一社のみが圧倒的な高収益をあげている。

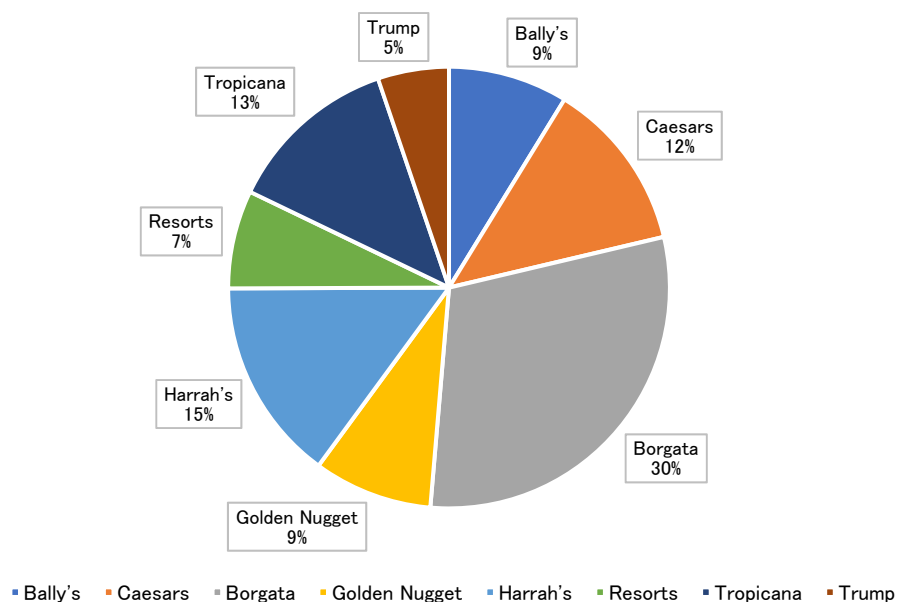
尚、2016 年末現在運営中の施設を下記表 1 に、2006 年の施設別総粗収益率を下記図 4 に示す¹⁰。

表1： 2016 年末アトランチックシティ・現状施設概要

出所：カジノ管理委員会公表資料より作成

| | 営業開始 | 場所 | ホテル部屋数 | テーブル台数 | スロット台数 |
|---------------|------|------------|--------|--------|--------|
| ボード・ウォーク区域施設 | | | | | |
| Resorts | 1978 | Uptown | 942 | 72 | 1561 |
| Bally's | 1979 | Midtown | 1749 | 171 | 1840 |
| Caesars | 1979 | Midtown | 1141 | 137 | 1855 |
| Tropicana | 1981 | Down beach | 2078 | 131 | 2343 |
| マリーナ区域施設 | | | | | |
| Harrah's | 1980 | Marina | 2590 | 175 | 2172 |
| Golden Nugget | 1985 | Marina | 727 | 88 | 1454 |
| Borgata | 2003 | Marina | 2767 | 266 | 3026 |

図 4： 2016 年施設別売上(GGR)総計比率(出所:カジノ管理委員会公表資料から作成)



¹⁰ Bally's, Caesars, Harrah's は、同一グループ(Caesars Entertainment)の別ブランドになる。ホテル部屋数、カジノ内のゲーム関連機材や機械等も二つの区域で類似的な総数になるが、Borgata の大きさは群を抜いている。マリーナ地区の 3 施設の売り上げは市全体の総施設の売り上げの 54%を占めている。

上記は下記を示唆している。

1. 2016 年から 2017 年にかけての同市のカジノ施設売り上げは、激変期を乗り越え、一定レベルに落ち着いている。総供給量が施設の閉鎖等で縮小したために、需給は安定的なレベルに留まっているのであろう。他州との競争下にあるとはいえ、同市には一定の集客力があることは疑いない。施設群がハブとして集約しているリゾート施設で、かつ海浜地域にあり、海水浴やビーチでの遊びをも楽しめ、コンベンションも開催できる都市は他の東部諸州には未だない。アトランチックシティには、他の州、他の大都市には無い異なる魅力もまだあるということであろう。
2. 全ての施設は各々安定的な売り上げ推移を示しているが、マクロ的にみるとこのアトランチックシティの総粗収益（GGR）の過半を稼ぎ出しているのは最早ボード・ウォークのカジノ施設ではなく、マリーナ地区の IR 施設になる。今後この趨勢がどう展開するかは、予測できにくい点もあるが、多様なアメニティやサービス・コンテンツが豊かな施設が、今後とも集客の要になることは間違いない。市場環境と顧客の行動は大きく変化しており、多様な顧客のニーズを満たすことのできる施設のみが、多様な客層の集客を可能にし、将来的には勝ち組になる可能性が高い。これが IR の強さなのだろう。一つの地域の中でも、顧客を惹きつけられる施設とそうでない施設があるのだ。施設のもたらす魅力が顧客を呼び、勝者となるパターンがここにある。

トランプ・タージマハール・カジノは昨年 10 月に閉鎖され、この施設のオーナーたるアイカーン氏は、何と施設自体をフロリダ州をベースとする部族カジノ事業者であるハードロックカジノに売却した。同社は意欲的な更新投資を手掛けるとの情報もある。また巨額の資金を用いて建設され、実質的に破たんしていた Revel¹¹もようやく買い手が決まり時間の問題で稼働しそうな雰囲気がある。一方、ボード・ウォークの破たんした施設を買収し、再生しようとする地元企業の動きも顕在化している。あるいは、既存の事業者同志が競争ではなく、共働で市をもちたてようとする動きもでてきた。アトランチックシティの施設は今のままの二分化した形で推移するのか、あるいは Borgata や Revel 等の非カジノ領域に強い IR 施設がけん引し、ラスベガスの IR 施設群へと変貌するのかは、今後の同市の重要な選択肢となりそうである。同市が再生できるか否かの鍵はここにある。

アトランチックシティ等カジノで失敗し、破たんした典型事例、過去の遺産等として一方向的に決めつける意見もあるが、現実はそう単純ではなさそうである。

¹¹ 2012 年 4 月にオープンした IR 施設で、同年 9 月にはチャプター 11 を申請し、破たん。新たなオーナーの下で TEN と改名し、動き出す気配がある。1399 室のホテル、2 つのナイトクラブ、13 のレストラン、劇場 2 つ、プール、2500 台スロット、120 テーブル等 Borgata 並の IR でもあり、これが動き出せば、ボード・ウォーク地区も活性化しうる可能性は十分ある。

G2EAsia 2017

2017年5月16日より18日まで写真1のように2017年G2EAsiaにスピーカーとして招待され講演を行ってきました。

写真1



2016年末に日本でIR推進法が可決したことを受けて日本のIRについての講演かと当初思いましたが「お題」は日本の宝くじでありました。と、申しますのは、招聘主体は写真2のようにAsia Lottery Forum and 7th China Lottery Industry Salonであったからです。マカオのカジノをはじめとする収益は世界ダントツであることはよく知られていることであると思われますが中国の宝くじについては一部を除いてよく知られておりませんがかなりの収益を上げています。このChina Lottery Industry Salonの設立者であるProf. Suによると2009年の中国宝くじの売り上げは1,325億人民元(1人民元=16円と計算した場合、2兆1,200億円)であったとのことですが2016年には3,946億人民元(先ほどと同じレートで計算した場合、6兆3,136億円!)の売り上げにまで伸びたそうです。単純に控除率を50%と計算した場合でも3兆円を超えるGGRが中国宝くじより生み出されているこ

となり、いわば「もう一つのマカオ」が中国本土に存在するとも言えるかもしれません。

写真 2



ただ、やはりこれだけの収益を上げるようになると社会的なひずみも目立つようになってきており「不正に対する疑念」「民営化に関する懸念、期待」そして「依存症」に対していわば中国の宝くじ産業はCSR(社会的責任)を果たさざるを得なくなってきたおり、今回の Asia Lottery Forum and 7th China Lottery Industry Salon においてもその観点が非常に重要視されている印象を受けました。中国本土にはいわば「合法的なカジノ」は存在しておりませんし、今後も国の成り立ちからすると合法的なカジノが誕生する可能性は極めて低いと考えられます。ただし、中国本土では、いわば「宝くじ」はギャンブルとは表立ってみなされていけませんのでこれからも宝くじとしての当初の形態より少しずつ形態を変えながら更に売りあげを増やしてゆくことが予想されます。ただ更に売り上げを伸ばしてゆくということは一層、中国本土において社会的責任を問われることになることは確実で、そのためこのようなフォーラムは継続してゆかざるをえないことは間違いないでしょう。今回講演したメンバーは大学の宝くじ研究所（彩票研究所：中国の大学には北京大学に限らずこのような研究所が存在します）をはじめとした中国本土の研究者が多くの割合を占めていましたが、旧知のマカオ大学の Dr.Davis Fong、台湾科学技術大学の Dr.Liu Day-Yang も講演を行っていました。いわずと知れた Dr.Davis はマカオ大学のカジノ関連のエキスパートでありマカオのカジノの依存症対策をいかに本土の宝くじの依存症対策に適応

するかについて知見を披露しており Dr. Liu は台湾宝くじ、台湾スポーツくじの制度設計にもかかわっておいりましたので台湾のスポーツくじを含めた宝くじのありかたについて中国本土の宝くじに参考になる形で講演を行っていました。珍しいところだと今、内国人が入れるようなカジノの設置を許可したベトナムからも旧知の Prof. Augustine Ha Ton Vinh がベトナムの宝くじの形態とベトナムのカジノの制度について講演を行っており時節柄かフロアーから多くの中国本土から来たと思われる聴衆より多くの質問を受けていました。

全体としてゲーミング産業の果たすべき社会的責任は、国により多少相違はあれど同じ方向に向かっているという印象を強く受けました。

視覚障害者への囲碁普及：日本視覚障害囲碁普及会の紹介

1.はじめに

近年、AI 対プロ棋士の対戦によって、頭脳ゲームの中でも囲碁が脚光を浴びている。黒石と白石だけを用いるシンプルなルールでありながら、ゲームとしての変化の数が非常に多く、AI では人間に勝つことが難しいと考えられてきたのである。

囲碁の最強は人間か AI かという問題はさておき、本稿では囲碁普及に着目し、なかでも視覚障害者に囲碁を普及しようとしている団体を紹介したい。

視覚障害者の娯楽として囲碁を普及させることを目的に設立されたのが日本視覚障害囲碁普及会である。本稿では、同会の活動紹介を通じ、従来は断念されがちであった、視覚障害者への囲碁普及をいかにして進めてきたかを概説する。

2. 会の概要とこれまでの略歴

日本視覚障害囲碁普及会

設立：1993 年

代表者：湯川光久（関西棋院九段） 事務局：宮野文男

現在の会員は 300 名 ボランティア 50 名（2017 年 5 月現在）

卒業生（囲碁体験者）400 名

日本視覚障害囲碁普及会（以下、同会）は、視覚障害を持つ人たちの娯楽として囲碁が適しているのではないかと考えた宮野文男氏の呼びかけによって大阪市に設立された。会が発足したばかりの 1990 年代前半は、主に関西圏の大学囲碁部の学生に呼びかけることで、大阪・京都・神戸において普及活動を開始した。当時の対象者は主に盲学校の生徒（レクリエーションの時間）、あるいは盲学校の教員（放課後）であった。その後、ラジオで囲碁の体験希望者を募るなどして、関西の盲学校生徒を中心に囲碁普及に努めるようになった。

社会福祉法人「日本ライトハウス」の加藤俊和所長（当時、現在は国視覚障害者情報提供施設協会参与・サピエ担当）により、点字テキストが印刷され、希望者に配布されるなど、幅広い普及活動を行っている。

1995 年 3 月に第 1 回の全国大会を開催し、関西の盲学校からは 11 人が出場した。それ以降、定期的に大会が開催されてきたが、第 9 回（2006 年）からは、毎年筆者の所属する大阪商業大学において全国大会が開催されており、今年 11 月の大会で第 20 回を迎えることになる。ちなみに、昨年の大会（第 19 回）では、視覚障害者 90 人を含め、選手 120 人、ボランティア 40 人という大規模な大会に成長している。

現在は、事務局の宮野文男氏をはじめ、関西棋院の湯川光久九段、囲碁梁山泊編集長の浅江季孝氏、加藤俊和氏、筆者の松村、さらには多数の指導ボランティアの皆さんによって会が運営されている。

3. 専用碁盤の製作・配布

視覚障害者への囲碁普及と聞いて、まず疑問になるのが碁盤や碁石をどのように改良したのかということであろう。詳しくは後述するが、同会では大会における「公式盤」として、9路盤（交点の数が $9 \times 9 = 81$ ）を用いることにした。通常の碁石と同じく、黒石、白石を用いるが、視覚障害者が触って認識できるように、黒石の表面には溝が掘られており、白石の表面はなめらかである。碁盤は鉄製で、碁石の中にマグネットが入っているため、碁石の並びを手で確認してもずれてしまうことがない。着手と同時に、自分の着手地点の座標を「34」、「57」のように発声して、相手に着手を伝える。同会はこのような碁盤を製作し、盲学校をはじめとするボランティアの活動場所に配布してきた（図1）。



図1 視覚障害者にも晴眼者にも使える公式盤 写真：日本視覚障害囲碁普及会提供

4. 9路盤に特化した普及

しばしば9路盤は入門者用の碁盤として扱われがちである。つまり、まず9路盤でルールを覚え、棋力が上がるにしたがって、13路盤、19路盤とより大きな碁盤に変えていくのがしばしば見られる普及方法である。このように、「過渡期としての9路盤」ではなく、普及会の公式盤とすることで、すべての公式対局をこれで行うことにした。先に紹介した加藤俊和氏のアドバイスによるところも大きい。普及会の対局に、なぜ9路盤がふさわしいといえるのか、詳しく説明しよう。

4-1. 手のひらに合うサイズであること

図1 をご覧いただければお分かりのように、9路盤であれば両手を広げた範囲内で碁盤を包むことができる。黒石、白石、空白点を確認するのに適したサイズである。加藤氏によ

ると、視覚障害者が囲碁を打つ場合、頭の中に碁盤を再現し、そこに黒石と白石を置いていくことになる。時々手で触って碁盤で確認することはあるが、我々晴眼者が「目で見て」戦局を確認するのは、根本的に異なるメカニズムで認識しているのである。そのため、19 路盤になると、頭の中に $19 \times 19 = 361$ の交点を用意しなくてはならなくなる。ここに黒石、白石を配置していくのは想像しただけで困難な作業である。視覚障害者の中にも 19 路盤を楽しむプレーヤーは存在する（おそらく日本に数人程度）が、対局に大変な疲労を伴うという。そこで、同会は初心者からアマチュア高段者まで、9 路盤対局に統一したのである。

4-2. 9 路盤に碁の楽しさが凝縮していること

9 路盤を入門者用の碁盤であるとみなすこともあると述べたが、9 路盤だから簡単に変化が読めるということにはならない。1987 年から 2002 年まで続いた人気番組「ミニ碁一番勝負」をご記憶の方もおられよう。現在日本囲碁界のトップである井山裕太氏が、6 歳の時に出場し、5 連勝を記録したことでも知られる。プロ対プロが対局し、勝負できるということは、まだ必勝法が確定していないということでもあり、盤面が狭くてもその局面は無限の変化を含んでいるといえよう。19 路盤で言う布石にあたる開始後数手を経て、中盤の石の競り合い、死活、コウ、さらには形勢判断に応じた作戦など、囲碁における楽しさが凝縮されていると考えている。

4-3. 気軽に楽しめる 9 路盤

対局に必要な時間が短くて済むのが 9 路盤のよさでもある。19 路盤と比較して、面積が約 $1/5$ になっているので、短い時間で楽しむことができる。19 路盤の対局は、テンポよく打てば 1 局 40 分程度で終わるが、9 路盤は 1 局数分程度で打ち終えることができる。さまざまな相手と打ちたいときなどにも、短時間で対局できるという利点は生かされよう。

5. 視覚障害者用囲碁ソフトの配布

1997 年、元島根県立旭中学教員の田淵卓夫氏によって PC 用音声囲碁対局ソフト「卓ちゃん」が作成された。AI が対局相手をしてくれるだけでなく、着手点を音声で知らせ、カーソルで希望の位置に打てるよう工夫した、世界初の音声囲碁対局ソフトであり、同会では希望者にソフトを無料で配布している。

<http://fmiyano.sakura.ne.jp/download.htm>

6. 今後の課題

現在、囲碁ソフトの棋力向上、インターネットを介した囲碁対局の可能性など、囲碁普及に向けたインフラは整いつつある。しかしながら、視覚障害者に対する囲碁普及の中心はボランティア指導員のマンツーマン指導であり、彼らの活躍に頼らざるを得ない。徐々

に指導員の高齢化も進む中、人員不足が起こり始めているという。そんな中、普及会の活動に興味を持ってくれる大学生も居るという明るいニュースもある。ニューズレター読者の皆様にも普及会の活動を知っていただくのが本稿の目的である。活動内容、ボランティア等についてのお問い合わせは下記の「日本視覚障害囲碁普及会」まで寄せられたい。

日本視覚障害囲碁普及会

〒565-0853 大阪府吹田市春日 4-11-4-205

連 絡 先 電話 06-6318-6278 FAX06-6338-6715

メールアドレス fmiyano@skyblue.ocn.ne.jp

参考資料

日本視覚障害囲碁普及会ホームページ

<http://fmiyano.sakura.ne.jp/>

いってんちろくいつわりぼなし
翻刻『一天地六偽咄』

『一天地六偽咄』は江戸時代に書かれたサイコロ賭博を題材にした洒落本である。本は国立国会図書館に所蔵されており、序文の末尾には安政二(1855)年二月、春陽舎という執筆者名が見える。春陽舎という人物については調べたが全く分らなかった。

江戸時代以前から賭博は禁止され、どの時代でも禁令が出されている。それでも現在までなくなっていないことは周知のところであるが、したがってここまで賭博に徹した本は珍しい。賭博ゲームについて記した書籍は何点かあるが、小説はほとんど見たことがない。

「一天地六」とはサイコロのことで、上面を1にしたとき下面が6となるので、このように呼ぶ。内容は12の短編から成る。すべてサイコロ賭博に関することだが、偽咄とあるようにフィクションである。

漢字にはほとんど振り仮名が振られていて読みやすいが、当て字などもあって完全に解読できたわけではない。また文中には意味不明な用語が多い。サイコロ賭博の専門用語だと思われるが、江戸時代、明治時代の賭博の本でも見たことのないものが多く、解読できなかったものが多数ある。なお、文章内には読点（、）が多いが全く句点（。）がないが、筆者の方で文の区切りとした方が良いと判断したものは句点にした。また崩し字の解読力不足による誤りも多いと思われる。ご指摘いただければ幸いである。

一天地六偽咄初編自序

はるさめ つれづれ まま いちがふ ねいり ゆめ まじ
春雨の徒然なる俚に、一爛のんでとく寝入しよしに、夢もさめ、真々／＼として、ふと
おもえらく、天神梅をあいせば、鬼子母神柘榴を賞すり、茶人寂を悦べば笑婦人南京茄子
を好く、金比羅蟹を忌ば²⁾、日蓮宗一向宗を嫌ひ、上戸汁粉を悪み、辻君てふちんを恨む、
是皆人として好と不好と有ものなり。我らが中にも善惡の両道あり、先芸道は弓、馬、
槍、劍、砲術家、亦倭歌、俳諧、狂歌、書、詩画、算術、濃薄茶、煎茶、香利、琴、
鼓弓、琵琶、三弦に、笛太鼓、鼓に謡、鞠、立花³⁾、活花、音曲、盆石画⁴⁾、水画⁵⁾
や狂句、建茶番⁶⁾、是に遊べし善道いで、此外酒と色欲情、賭もの勝負、是是非とす。
尤人として右のうち、執心なきにしもあらず。去る狂句調に○盥からたらひの間が
五十年といへる句あり、先人間生涯を旅行に比較し転ばぬ先の杖を突たる、賞金の山、
楽隠山、安穩寺迄の、道法五万四百里や是を一ちに拾里ならしに剽ゆけば五十年の

ひかず 日数なり、此海道好む処の道多しといえど舟迷ふまじきは博奕の道也。右道筋へ入り
 そのとふげ 越るまでは蹴爪突所多く、くるしみ難渋の関所につまづく事郭もあらしむか。

やす まつりこと 安き 政 ふたつのとし 7 きさらきの月

京都、山の端の埜夫 春陽舎

- 1) 鬼子母神柘榴を賞す：鬼子母神は他人の子を食べていたが仏に諭されて人を食うのをやめ、柘榴を食べるようになったと言われている。
- 2) 金比羅蟹を忌ば：金毘羅信仰では、蟹は金毘羅神の使いとされており、信者は蟹を食べないといわれている。
- 3) 立花：生け花の型の一つ。
- 4) 盆石画：黒い漆塗りの盆の上に石や砂を用いて山水など自然の風景を描いたもの。
- 5) 水画：絵の画法の一つ。水面に絵の具を流して絵を描く。
- 6) 建茶番：立って鬘や衣装を付け、化粧をして芝居をもじった滑稽な仕草をする演芸。
- 7) 安き政ふたつのとし：安政二年（1855）

いつてんちろくいつわりはなしもくろく
 一天地六偽咄目録

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 一 壺 廻 | み さいごじうろくめ ず 三ツの簗五十六目の図 |
| 一 式 廻 | なげざいはじま こと 投簗 始りの事 |
| 一 参 廻 | おゝやまとばくちこんげん 大日本博奕根元の事 |
| 一 四 廻 | ばくちてんぐさい なか うま 場朽天狗簗の中より産るゝ事 |
| 一 五 廻 | さい わづらい 簗の 煩の事 |
| 一 六 廻 | よくしんやふかぞう 欲心屋深蔵の話 |
| 一 七 廻 | こずいこたちまわ 小持立廻りの事 |
| 一 八 廻 | さい かみまもら ばくちうち 簗の神守護ぬ博奕打の事 |
| 一 九 廻 | ばくちうちひとあめ ふゆ 場朽討雨 中に殖る図 |
| 一 拾 廻 | どうぐさいいんぐわものがたり 道具簗因果物語りの事 |
| 一 拾壺廻 | てうはんさいたわむれ 丁半簗 戯の事 |
| 一 拾式廻 | さい かみまも ひと としころ 簗の神護ル人の年頃の事 |

右目録大略終

〇一 廻 み さいごじうろくめ づ
三ツ簗五十六目の図

解説：3個のサイコロを振った時の出た目の呼び方を列挙したもの。見た目から理解でき

るものもあるが、意味不明なものも多い。

| | | |
|---------------------|-------------------|-------------------|
| 御備 | 鍛冶屋の五ツ | とつぷり |
| 銚 | 狼の足 | 青田 |
| 蕎麦蒸籠 | 山形 | よからふ |
| 篠田 | 国の守 | |
| 漣 | 日光 | 供待 |
| 胴切 | 雨降の洗濯 | でく四 |
| 石部 | 御飭 | 蘆の十四 |
| 新橋 | 虎の尾 | |
| 横撫 | 耳切 | 御寺の炬燵 |
| 小湊 | 善光寺 ¹⁾ | 見附の勝手 |
| 剣先 | 天下第一 | 間の四 |
| 揚六 | さゝんご | |
| 三日坊主 | 玄徳 | 四三一 |
| 差駕籠 | 土佐の湊 | 割重箱 |
| ぶらのさん ²⁾ | 柏ッ葉 | 盛り猫 ³⁾ |
| 霊岸寺 | 男根の天窓 | 大長持 |
| おさよ | 花車 | さんかみ |
| 倅 ⁴⁾ | 彼岸の中日 | 鼠の剣先 |
| 西禄 | 番丁侍 | でく二 |
| 大振袖 | 神田の纏 | |

- 1) 二四五 善光寺：五四二は「ぐしに」と読む。「ぐしに（牛に）引かれて善光寺」という洒落である。
- 2) ぶらのさん：職がなく、ぶらぶらしている人のこと。
- 3) 二六五 盛り猫：562で「ゴロニャー」ということであろう。
- 4) 一六五 倅：盗賊、石川五右衛門の倅の名前が五郎市である。

○弐 廻 投げさいはしま こと 投簍 始りの事

解説：サイコロを投げることの始まりは古代の中国だというもっともらしい解説である。

昔、漢土、五の国口の紂王¹⁾の後、五三長女と申御方懷胎せしとき、臣下の一二五を召して、此度婦人が胎内の一子、男女を占ふべしと詔あるに依て、則象の牙に

て刻^{きざみ}たる、四角^{しかく}四面^{しめん}の物^{もの}を二ツ出^{ふた}し、一二五^{いげんとく}、良^や考^{かん}あつて、即^{そく}智^ちをめぐらし、彼^かの角^{かく}なるものへ、一^{いつ}天^{てん}、地^ち六^{ろく}、南^{なん}三^{さん}、北^{ほく}四^し、東^{とう}五^ご、西^{さい}二^にと、目^めを盛^{もり}つて既^{すで}に投^{なげ}出^だしぬ。是^{これ}、長^{なが}目^めに出るときは、女^{じよ}子^しなり、半^{はん}目^めに出るときは男^{なん}子^し也^{なり}と答^{こた}ふ。則^{すなはち}投^{なげ}籠^{ごう}の長^{なが}半^{はん}始^{はじめ}とかや。我^わ朝^{あさ}にて長^{なが}半^{はん}十二^{じふに}目^めに碎^{くだ}けるも、天^{てん}神^{じん}七^{しち}代^{だい}地^ち神^{じん}五^ご代^{だい}を比^ひするもの也^{なり}。末^{まつ}世^せまででんぶ^{でんぶ}に^{さい}ては、籠^{かみ}の神^{かみ}の祭^{まつり}、正^{せい}月^{がつ}松^{まつ}の内^{うち}、子^こ供^{ども}集^{あつ}り、往^ゆ来^きの人の足^{あし}を止^{とど}め、籠^{かみ}物^{もの}を取^とる事^{こと}、亦^{また}懷^{わい}中^{ちゆう}して魔^ま除^{じゆ}に成^なる事^{こと}、此^{この}由^ゆ縁^{えん}なるか。

- 1) ピンの紂王：ピンは1のこと。殷の紂王（殷は中国古代の王朝で、紂王はその第30代の王）の洒落。
- 2) 田夫：農夫、いなか者。
- 3) 籠の神：歳^{さい}の神^{かみ}などとも書く。集^{あつ}落^{らく}の境^{きやう}に祀^{まつ}る神^{かみ}。道^{みち}祖^そ神^{かみ}。

○三 廻 おおやまとぼくちこんげん 大日本博奕根元の事

解説：日本での博打の初めとして、岡山張蔵という男がその祖であるというもってもらしい話。

張^{はり}間^まの国^{くに}、三^{みつ}面^{めん}郡^{ぐん}、初^{はつ}受^う村^{むら}に、岡^{おか}山^{やま}張^{はり}蔵^{ぞう}といへる有^う徳^{とく}なる百^{ひやく}姓^{せい}ありしが、故^{ゆえ}有^あつて今^{いま}は賤^{いやし}き身^みとなり、憂^{うれ}きとしの月^{つき}日^ひを送^{おく}りけり。去^されとも此^{この}人^{ひと}仏^{ぶつ}心^{しん}に入りて念^{ねん}仏^{ぶつ}さんま^いい昼^{ちゆう}夜^や怠^{おこた}りなく、後^ご生^{せい}を願^{ねが}ひ、我^わ菩^{わか}提^{ぼだい}所^{しよ}たる、山^{やま}形^{がた}村^{むら}、六^{ろく}揃^{ぞろ}山^{さん}霊^{れい}岸^{がん}寺^じ、本^{ほん}堂^{どう}大^{たい}破^はに及^{およ}びし故^{ゆえ}、何^{なに}卒^そ再^{さい}根^{こん}せん事^{こと}心^{こころ}掛^{かけ}しに、我^わちからおよばず、張^{はり}蔵^{ぞう}ふとこゝろ付^{づき}、家^{いえ}に伝^{つた}わ^るる賽^{さい}二^{ふた}つあり、其^{その}時^{とき}幸^{さい}ひ七^{しち}月^{げつ}十三^{じふさん}日^{にち}の事^{こと}なれば、霊^{れい}岸^{がん}寺^じの門^{もん}前^{ぜん}に至^{いた}り、蘆^{あし}を敷^敷き、其^{その}上^{うへ}に楽^{あぐら}坐^ざしてけり。是^{これ}盆^{ぼん}蘆^ざの始^{はじめ}り也^{なり}。そのとき張^{ちやう}蔵^{くら}、彼^{かれ}の賽^{さい}二^{ふた}つをもつて、寺^{さい}詣^{ふた}のひとまねひふ、せんぞうくやうふたふまんぞうくやうびつきはながらえすで人を招^{まね}き、一^{ひと}と振^ひりふれば、千^{せん}双^{さう}供^く養^{やう}、二^{ふた}振^ふりふれば、万^{まん}僧^{そう}供^く養^{やう}と、錢^{せん}拾^{しつ}貳^に銅^{どう}を得^えて既^{すで}に本^{ほん}堂^{どう}建^{こん}立^{りつ}、大^{たい}願^{がん}成^{じやう}就^{じゆ}せしや、此^{きん}事^{がう}近^{きん}郷^{かう}まできこえて、張^{はり}蔵^{ぞう}が仏^{ぶつ}心^{しん}感^{かん}ぜぬものもなかりける。よつて御^お代^{だい}官^{くわん}加^か賀^が四^よ手^て松^{まつ}様^{さま}へもれ聞^{きこ}へ、奇^き特^{とく}もの也^{なり}とて、一^い二^に五^ご八^{ぱつ}年^{ねん}五^ご四^しノ九^く月^{げつ}、御^ご褒^{ほう}美^びとして、鳩^{はと}の玉^{たま}子^ご二^{ふた}つくださる。今^{きん}世^{せい}異^い名^{めい}に、座^ざ料^{りやう}を寺^{てら}といふ、亦^{また}堂^{どう}取^とり、大^お坊^{ぼう}主^ず小^こ坊^{ぼう}主^ずなといふも、皆^{みな}此^{この}いわれなるか。

- 1) 張間の国：播磨の同音による書き換えであろう。
- 2) 七月十三日：サイコロを振る場所を盆というが、それとお盆を掛けている。
- 3) 堂取り：賭博の親を胴といい、胴を務めることを胴を取るという。

○四 廻 ぼくちてんぐさい 博奕天狗籠の中より産る事 附り 長半躰方の事

解説：サイコロ賭博の際のすべきこと、避けるべきことを解説している。

○先附目^{まつつけめ}りを覚^{おぼ}へる飲進^{かんじん}なり。○壺^{つぼ}も振付^{ふりつけ}ないでふるとばつた壺^{つぼ}、横明^{よこあけ}壺^{つぼ}の杯^{なぞ}と人が笑^{わら}ふなり。是も暇^{ひま}の時稽古^{ときがいこ}をして置くべし。○成取^{なりど}りは脾胃^{ひい}の能^{よい}ときに仕^しべし。脾胃^{ひい}のわるひときすると成試^{なるため}しなし。簗^{さい}さへ捕^{つかめ}へると損^{そん}の行^{いく}ものや能^{よく}心得^{こころへ}て仕^しべし。○残^{のこ}らずと取^とられて仕舞^{しま}ふてもぴんぞろよなげの錢^{ぜに}と夜鷹^{よたか}蕎麦^{そば}の錢^{ぜに}はのこすべき也。○狐^{きつね}チョボイチ^ちにて一六^{いちろく}の付^つキ 山形^{やまがた} 差駕籠^{さしかご} 壺岸寺^{れいがんじ} 大長持^{おおながもち} 青田^{あおた} 四一六^{しつちろく} 是^{これ}らの壺^{つぼ}にてくらひこんだらば振^ふきれぬもの也。貰^{もら}ふべからず流^{ながす}すべし。○廻^{まわ}りチョボイチにて青山^{あをやま}壺^{つぼ}待^{まち}など随分^{ずいぶん}よし。○小皿^{こざら}長半^{てうはん}に脱打^{ぬきぶち}の時^{とき}し壺^しメ六^{ろく}百文^{ひゃくもん}の通用^{つうよう}の衣類^{いるい}下^さげるヲイ其^{その}うちで晒^{さら}しの禪^{ぜん}と手拭^{てぬぐい}半紙^{はんし}一帖^{いちてう}買^かふ事^{こと}よし。併^{しかしく}来^きるうち一^だばん出^でしてくれヲイ剥^{はぐり}を^{ひとたま}一玉^か借りて呉^くレ杯^{なぞ}はかすり^{かなれ}も機^{きた}細工^{さいいく}也。我慢^{がまん}にもすべからず。能^{よく}慎^{つつしむ}べし。



このおとこと 此 男 取れて仕まふと場朽^{ばくち}の 講 釈
あいて 相手^{あいて}さへあれば夜通^{よどふ}しなり
くびひき すがた 首引^{くびひき}の 姿 おかしき二見^{ふたみ}湯
しめられた身^みは腹^{はら}のたつ浪^{なみ}



てんとくは 内をかむつて 着るものか
せけんへたんと ぼろが^で出るなり

- 1) 附目：賽賭博で狙う目。
- 2) ばつた壺：壺の開け方が下手なこと。

- 3) 横明壺：伏せた壺を開けるときに怪しい開け方をすること。
- 4) 狐チョボイチ：ちょぼいちの遊び方の一つ。サイコロを3個用いる。
- 5) 𪛗^{しほん}六^{ろく}百^{ひゃく}文^{ぶん}：四文銭百枚の穴に紐を通したものを一本と呼んだので、それが四本で一貫六百文になる。
- 6) はぐり：寺銭とは別に、場所の貸主に払う座料。
- 7) かすり：勞せずして利を得ること。

○五 廻 ^{さい}賽^{わづらい}の 煩^{わづらい}の事 附リ ^{かけあい}ぴん助^わ・六 内 ^わ掛^{かけあい}合^わの話

解説：擬人化された2個のサイコロ、ぴん助と六内の会話である。ぴん助が、前夜、サイコロ賭博に使われたが、火鉢に落とされたり火を乗せられたりして大怪我をしたと話し、それを六内が慰める筋立て。



なり出した神は ^でおと^{かみ}？の ^{おゝあらし}大 嵐 ^{あて}こけらに当て ^{ふきつけ}吹付る雨 ^{あめ}

ピンなんと六^{ろく}内^{ない}きひてくだし。夕^{ゆふ}べ成^{なり}取^{どり}に遣^{つか}われた ^{ところ}処^{ところ}がおれひとり ^{ほね}骨^{ほね}を折^{おつ}て成^{なり}支^{つかへ}に仕^して遣^やつた。夫^{それ}から中^{なか}でいちばんこけりなやつがあつて、成^なツて悪^{わる}投^{なげ}を仕^しヤアかつたからきゝねへ。自^{おれ}己^まの間の^{ほか}わるさ、外^{ふた}の二^{きん}人は^た畢^ま丸^ひ火^ま鉢^{ぼち}の縁^{ふち}で腰^{こし}の骨^{ほね}をぶつた斗^{ばか}り、己^{おれ}獨^{ひとり}人^{ひと}が運^{うん}のわるさにヤア、火^ひ鉢^{ぼち}の中^{なか}へ振^ふり落^おされた。それに早^{はや}く抓^{つま}みだしてくれゝば能^{いい}に、知^し

れない／＼^{たづね} 尋^{うち} 内^{やゝいととき}が良一時ばかり、^{そのなか} 其中に^き 氣^{きい}の利^{みつ}た人^{みつけ}が見^{くれ}附^{つまみだ}出して呉^つて、^つ 抓^{つまみだ}出してく
れたから、^{おれ} 己^{ゆえたゝみ}もくるしい故^{あいだ} 暈^いの 間^{またつけ} へかくれて居^{とも}ると亦^{また}附^{つけ}木^ぎを^き 燈^{とも}して^{さが} 搜^{さが}すやらおゝ騒^{さわ}
ぎよ。^{そのとも} 其^{つけ}燈^{また}しかけ^{あた}の附^の木^{あつ}を、又^と天^と窓^めのうへに^あ 乗^あせられて、^と 熱^{あつ}～イ^とヤ^めモウ^あ。飛^とんだ目^めに^あ 合^あツ
た。^{からだちう} 體^そ 中^の おゝや^だけど^さをした。其^{また}うへ^{やつ}さがし^{なり}出^{まづにぞろ}されて、亦^{また}ふられるとも^{きんばい} ふ^きころがる^き 事^きが^き 出来^き
ねへから^{なげ} 投^{しだい}られ^し 次第^いにして^{また} 仕^{やつ}て^{なり} 居^{まづにぞろ}たら又^{また} こ^{きんばい}け^{きんばい}な^{きんばい} 奴^{きんばい}が^{きんばい} 成^{きんばい}だ^{きんばい}した^{きんばい}が／＼、^い 先^い二^い揃^いよ^いこ^いな^いで^い 三^い杯^い、
居^い塞^い五^い四^い二^い、三^い二^い六^い、御^い寺^いの^い 炬^い燵^い杯^いと七^い八^いへ^いん^い 成^いを^い ふ^いり^いや^いア^いが^いつ^いた。^{かわ} 側^{ちう}中^{ちう}おゝ^{ちう} あ^{ちう}らし、
成^{なり}取^{とり}の^{なり} 津^{なみ}波^{なみ}にし^{はな}や^{はな}ア^{はな}が^{はな}つ^{はな}た^{はな}と^{はな}話^{はな}せ^{はな}ば、^{はな} ロクそ^{はな}れ^{はな}は^{はな}ま^{はな}ア^{はな}と^{はな}ん^{はな}だ^{はな}目^{はな}に^{はな}出^{はな}会^{はな}ッ^{はな}た^{はな}ナ^{はな}ア^{はな}、^{はな} 手^{はな}前^{はな}の^{はな}か
ら^{はな}だ^{はな}も^{はな}左^{はな}様^{はな}焦^{はな}さ^{はな}れて^{はな}は^{はな}モ^{はな}ウ^{はな}う^{はな} ご^{はな}か^{はな}れ^{はな}め^{はな}エ^{はな}。能^よく^よ 木^よ賊^よで^よ 氣^よ長^よに^よ 療^よ治^よを^よ して、^よ 是^よか^よら^よ 近^よ所^よの^よ、
お^{ぼう}坊^{ぼう}さん^{ぼう}の^{ぼう} 所^{ところ} へ^{ゆつ} 行^{どうちう}て、^{どうちう} 道^{どうちう}中^{どうちう} 双^{どうちう}六^{どうちう}か^{どうちう}、^{どうちう} ぴ^{どうちう}ん^{どうちう}こ^{どうちう}ろ^{どうちう}が^{どうちう} し^{どうちう} 5) の^{どうちう}、^{どうちう} 手^{もち} 遊^や道^{やう}具^じか^じ、^{もち} さ^{もち}も^{もち}な^{もち}く^{もち}ば^{もち}、^{もち} 狐^{きつね}
に^{ばか} 化^{まじ}され^{まじ}ぬ^{まじ} 呪^{まじ}に^{まじ}、^{まじ} 守^{まも}り^{まも} 袋^{ふくろ}に^{はい} 這^{はい}入^{はい}ッ^{はい}て^{はい} 隠^{いん}居^{きん}役^{じよ}だ。ピンし^{いん}か^{きん}し^{きん}こ^{きん}ち^{きん}と^{きん}ら^{きん}が^{きん}わ^{きん}ず^{きん}ら^{きん}わ^{きん}ね^{きん}エ
と、^き こ^きけ^きめ^きら^きに^きは^き 勝^{かつ}こ^{かつ}とは^{かつ} 出^で来^きめ^きへ。^き 能^{よく}仕^{よく}た^{よく}もの^{よく}さ。^{よく} ド^{よく}リ^{よく}ヤ^{よく} 療^り治^{やう}に^{やう} か^{やう}ゝ^{やう}ら^{やう}ふ^{やう}か。

- 1) こけ（虚仮）：愚か。馬鹿。
- 2) 附木：木片の端に硫黄を付けたもの。マッチのようなもの。
- 3) 側：賭博で張る側。
- 4) 木賊：植物。硬いので砥石として使う
- 5) ぴんころがし：サイコロ賭博の一種。

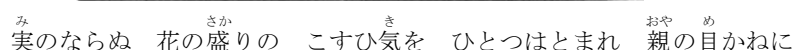
○六 廻 欲心屋深蔵が話

解説：欲心屋深蔵という人物について、その使っているサイコロが語るという設定。名前から欲の深い人物ということがわかるが、あまり賭博に通じていない素人を集めてイカサマ賭博をして金を巻き上げているようである。あまり強欲に行うので、あれでは結局金は残らないだろうと、サイコロがあきれている。

このよくしんやふかぞう いふ
此^{まい} 欲^{ねん}心^{はる}屋^{さき}深^な蔵^なと^な 云^なもの^なは、^な 毎^さ年^さ 春^な先^なに^な 成^なると、^な 酒^さ屋^さの^な 丁^な稚^な小^な僧^なや、^な 裏^な店^なの^な 嚙^なさん、^な 亦^なは
す^なつ^なべ^なが^なし 1) の^な 二^な才^な野^な郎^なや、^な む^なく^な 毛^なの^な 生^なえ^なた、^な 若^な衆^な交^なり^なで、^な 寺^なと^な 岡^なな^なぐ^なり^な 込^なみ、^な 側^な中^なべ^なる
り^なや^なう^なけん^ななり ^なこの^な お^なと^なこ ^なつか ^なさい ^ないわ ^なひさ ^なまた ^ないつ
了^な簡^な也^な。此^な 男^なに^な 使^なわ^なれる^な 簀^なの^な 日^なク。サイ久^なし^なひ^なもの^なだ、^な 亦^なけ^なふ^なは^なあ^なつ^なち^なへ^な行^なたり、
こ^なつ^なち^なへ^な行^なたり^なして、^な こ^なそ^な／＼^な 咄^なし^なだ。^な お^なゝ^な か^なた^な 晩^なに^なは^な こ^なぞ^なる^な 2) 積^なり^なだ^なら^なふ。^な 苦^なゝ^な しい^なナ
ア。^な 内^な会^な3) の^な 壺^な皿^なは^な 切^な立^な4) 茶^な碗^なに^な 紙^なを^な 巻^なく^なから、^な 窮^な屈^なで^な なら^なね^なエ。^な し^なか^なし^な お^なら^なが^な 主^な人^なも^な 餘^な
り^な 欲^な張^なり^なだ。^な 未^なだ^な 博^な奕^な芸^なは^な 真^なっ^な 暗^なだ。^な 第^な一^なマ^なア^な 簀^なの^な 目^な顔^なも^な 和^なら^なね^なへ^なで、^な 何^なぞ^なと^なら^なふ^なと^な 寺^なを^な
と^なら^な 取^なふ^なの^な 岡^なを^な 取^なふ^なのと、^な 馬^な鹿^な押^なの^な つ^なら^なひ^なや^なつ^なだ。^な あ^なん^なな^な 人^なに^な 儲^なさ^なせ^なると、^な 商^な売^な人^なへ^なす^なま^なね
へ。^な 今^な夜^な 岡^な壺^なだ^な 何^なぞ^なと^ない^なふ^なと、^な 五^な六^な盃^な面^なを^な ふ^なら^なして^な や^な遣^なる^なぞ、^な 左^な様^なす^なると^な お^な株^なで^な 頂^なて
見^なたり、^な 丸^なメ^なて^なみ^なたり、^な あ^なげ^なく^なの^な 果^なニ^なヤ^なア、^な 唾^なを^な 付^なけ^なて^な 暈^なへ^なこ^なす^なり^な付^なたり、^な あ^なり^なや^なア、
ま^なア^な 何^なの^な こ^なつ^なたら^なふ、^な 氣^なが^な 知^なれ^なね^なへ。^な 今^な夜^な こ^なそ^な 急^な度^な、^な 岡^なを^な 潰^なさ^なせ^なる^なから、^な 覺^な悟^なを^な 仕^なて^な 居^なる

- 1) すっぺがし：前髪を剃り落としたばかりの若い男。
- 2) こぞる：集める。
- 3) 内会：賭博師のいない素人だけの賭博の会。
- 4) 切立：できたて。

解説：少しずるい男の話。前章の強欲な男と異なり、まめだがけち臭い男である。前章の男については結局金が残らない、としているのに対してこちらは、これぐらい小ずるいことに徹すれば、儲かって末は楽しみ、としている。



博奕^{はくちや}打でもなし、商人^{あきんど}でもなし職^{しよくにん}人でもなし、そして色^{いろ}男^{おとこ}にも向かず、只^{ただ}小持^{こすいこ}にたち廻^{まわ}り、此^{この}男^{おとこ}真夏^{まなつ}の蚤^{のみ}の如^{ごと}し、あちこちを能^{よく}く喰^{くい}廻^{まわ}し、飛歩^{とびあるく}行。去^{され}ども此^{この}人^{ひと}、功能^{こう}は働^{はたら}く事^{こと}が好^{すき}ゆへ、何^{どこ}処^{いつ}へ行ても、お内義^{かみ}さんの氣^きに入り、場朽^{ばくち}座^ざの使^{つかひ}は頼^{たの}まずとも行たがり、水^{みづ}を汲^くせても味噌^{みそ}をすらせても能^{よく}く動^{うご}き、只^{ただ}此^{この}男^{おとこ}の疵^{きず}といふは、大飯^{おほめし}を喰^くふのと、博奕^{はくちや}場^ばを覗^{のぞ}ひて、請^{うけつ}壺^ぼの人^{ひと}に、四文^{しもん}呉^{くん}ねへ／＼を溜^{ため}ておいて、百^{ひやく}文^{ぶん}とつばまる²⁾と、懇意^{こんい}の質屋^{しちや}へあづけて置^おき、博奕^{はくち}が嫌^{きら}かとおもへば大^{だい}好^{すき}、其^{その}癖^{くせ}おゝ張^{はり}のチョボーはきらひだといつてせず、近所^{きんじよ}の、丁稚^{でつち}や、春屋^{つきや}³⁾男^{おとこ}、影番^{かげはん}濟^{すみ}の寺^{てら}男^{おとこ}を集^{あつ}めて、獨人^{ひとりもの}者の糊^{のり}売^{うり}婆^ばアさんの家^{うち}や、飴屋^{あめや}おこしの爺^{じい}さんの所^{ところ}を借^かりて、鑊^こ銭^{ぜに}チョボーの寺^{てら}取^とりと出^でかけ、漸^{やう／＼}に四百^{いっぽん}文^{ぶん}⁴⁾もたまると、其中^{そのなか}で氣^きの能^{よく}さそふな人^{ひと}に貸^か付^{つけ}て、翌^{あくる}日^ひ嚴^{ひど}催^{さい}促^{そく}なぞは、随^{ずい}分^{ぶん}どちら付^{つか}ずの道^{どう}楽^{らく}や。併^{しか}其^{その}くらひ、我^{わが}商^{しやう}売^{ばい}を、小持^{こすいこ}に立^{たち}まわれは、金^{きん}銭^{せん}も儲^もりて家内^{かだい}安^{あん}穩^{ゑん}、末^{すえ}たのもしき事^{こと}ぞかし。

- 1) こすいこ：ずるい。悪賢い。
- 2) つばまる：金銭が一定の額に達すること
- 3) 春屋：米などをつく職業
- 4) 四百文：四文銭 100 枚を通した緡^{さし}。緡は藁や紐に穴空き銭を通して両端を結んだもので、そのまま一本 400 文として通用した。

○八 廻 簗^{さい}の神^{かみ}守^{まも}護^らぬ博^{はく}奕^{ちやう}の事

解説：勉強をせずに遊んでばかりいて、中年になってから賭博にはまった男の話。こういう人間は天が勝たせないなので早く賭博をやめて堅気になるのが良いと締めくくっている。

幼^よ少^{せう}の頃^{ころ}より、読^よ書^み算^{さん}用^{よう}を嫌^{きら}ひ、使^{つか}の駄^だ賃^{ちん}をほしがりて、宝^{ほう}引^び、木^き図^づ、銭^ぜ打^{うち}²⁾の遊^{あそ}びを好^{この}み、中^{ちゆう}年^{ねん}に至^{いた}りて、尚^な両^{りやう}親^{しん}の言^{こと}葉^はをそむき、家^か業^{ぎやう}を未^み熟^{じゆく}にして、生^な氣^{まけ}、只^{ただ}諸^{しよ}賭^た事^{こと}に身^みを入^いれ、両^{りやう}親^{しん}に放^{はな}れて我^{わが}家^{かい}だん／＼とぐれはま³⁾となり一^{いつ}生^{せう}添^そふと思^{おも}ふ妻^{つま}には捨^{すて}られ、一^{いっ}家^け親^{しん}類^{るい}は音^{いん}信^{しん}ふ通^{つう}にし、いよ／＼かゝらふ島^{しま}もなく、流^る浪^{らう}せしが、去^{され}ども是^{これ}迄^{まで}苦^{くる}しみし故^{ゆゑ}、博^{はく}奕^{ちやう}の事^{こと}は忘^{わす}れず、終^{つい}に場^{ばく}朽^{ちやう}打^{うち}と出^でかけれども、元^{もと}息^{むすこ}子^こ株^{かぶ}の時^じ分^{ぶん}、銭^ぜびら^らを切^きらぬ故^{ゆゑ}、人^{ひと}が尊^{たつ}まず、是^{これ}則^{すなはち}ビイ／＼場^{ばく}朽^{ちやう}打^{うち}なり。此^{この}頃^{ごろ}は壺^{つぼ}皿^{ざら}の中^{なか}も少^{すこ}しは明^{あかる}く、見^みゆれども、おもふ様^{やう}にはゆかぬ故^{ゆゑ}に、不^ふ義^ぎ理^りが所^{しよ}へ出^で来て、人^{ひと}のおもわくあしく、不^ふ孝^{こう}の罰^{ばち}が当^{あた}り、不^ふ手^て腐^ふとなりて、氣^き質^{ひつ}あらく、立^{たち}上^{あが}りたる人^{ひと}には、媚^{こび}諂^{へん}ひ、弱^{よわ}き者^{もの}は倦^あま^くで込^こめやうといふ、心^{しん}底^{てい}なれば、天^{てん}道^{どう}既^{すで}に是^{これ}を惡^{にく}み、金^{きん}銭^{せん}の勝^{せう}利^りを得^えさせず、去^{され}ど人^{ひと}殺^{ころ}すの譬^{たと}の如^{ごと}く、此^{この}男^{おとこ}一^{いつ}生^{せう}の内^{うち}に、コイツ中^{なか}へおつりき⁴⁾だわへ、是^{これ}では博^{はく}奕^{ちやう}でくゑるだらふ杯^{なぞ}と思^{おも}ふ事^{こと}がわづか二^に三^{さん}度^ども有^{ある}かなし、逆^{さか}も簗^{さい}の神^{かみ}の守^{まも}り玉^{たま}ふ博^{はく}奕^{ちやう}打^{うち}と、肩^{かた}を並^{なら}べる事^{こと}はならず、おつりきだと思^{おも}ふ時^じ分^{ぶん}に、早^{はや}くこゝろを改^{あらた}め、序^{じよ}文^{ぶん}にいふ、本^{ほん}海^{かい}道^{どう}

いで、らくいんさん かた いそ ぜうふんべつ
へ出て、樂隠山の方へ急ぐが上分別や。

- 1) 宝引（ほうびき、ほっびき）：複数の紐の一方の端のいずれかの紐に当たりを付け、反対側を選ばせてあたりを引いた者に賞金や賞品を出す遊戯。賭博としても遊ばれた。
- 2) 木図、銭打（きづ、ぜにうち）：地面に図形を描き、そこに少しはなれたところから銭を投げさせた遊戯。賭博としても遊ばれた。
- 3) ぐれはま：あてがはずれること。食い違うこと。現在の「ぐれる」の語源。
- 4) おつりき（乙りき）：乙であること。一風変わっていること

九廻 博奕討 拵 苦 む事

解説：さいころ賭博に負けて禪一丁となった男の話。家族に頼まれて探しに来た男に見つけられ、負けた時の様子を子細に語る。おそらくいかさまに引っかかったと思われるが、一気に負けて着物も帯も取られる様子が生々しい。



つぼ なか あそ
壺ざらの 中もあかるく 見ゆるまで 遊びすごして うちはくらやみ

かん だはつてうぼりへん ゆきすぎやどんじらう もの しおとこ いち き あ おゝめ こ め
神田八丁堀辺に、行過屋鈍次郎といふ者あり。此男もふチョボーを切り上げて、大目小目
り と 出かけ 少 博奕打、気取りて、あるよないぐわい つきあて そのぼ みな しまい ふんどし
ひとつと成り、内へは帰られずして、まごつき、是を 譬 れば、泥に酔ふたる 鮎のごとし。
せんかた そのいへ あくるひまでね い ところ ともだち ぞう ものきた これ かたぎ
詮方なく、其家に翌日迄寝て居る 処へ、友達のびん蔵といふ者来り。是は堅気なり。

鈍次郎、夕部より内へかへらぬ故親たちに頼まれて捜しあるき 尋あたり。[ピン]鈍次手前
 まアどふした。内じやてへ／＼さがして居るは。[ドン]びん公いゝ 処へ来て呉た。マア聞
 てくだつし、夕部爰の内へいゝのが出来るいう事だから宵から附ていると、突当たがマ
 アつまんで話そふ。来て居た手合がみんないゝ相手さ。お寺の和尚さまや、商人の隠居ら
 しい人だの後家さまなどが交りに、己が壺へ来ると、ポンと伏せやした。さうすると、向
 ふに居る、和尚さんがいふにやア、少し壺をお貸なさひと。おつな手つきをするとおもつ
 たら、和尚がモシ兄さん、張つてもいゝかと、云アがるから、アイいくらでも張んなせへ、
 払いは付升とりきんでいると、そんなら張りませふと、六の一点へ四文銭で、
 壺メ五六百斗り、はりやアがつた。夫からおれもぶる／＼もので、勝負と明ると、六と
 出て、側中が六だらけヨ。みんなで三両斗りの払いに成つた。落銭^{おちせん}とみるとやつと
 壺貫斗り、己がふところにやう／＼式分しか無いのを、サアもち／＼して居ると、其和尚
 めが、ヤイどふする払イを附ねへか、金がなければ、其着物でもよこせといつて、坊主が
 真つ赤になつて、はだをぬぐと腕から背中いつぱい、朱ざしの彫もの、己も薄気味がわ
 るいから、サア／＼金が足りませんから、着物も帯も上升と誤ツて、裸に成ツてわた
 した。よく／＼見たら、頭巾を冠ツた隠居は、横町へ越してきた、公事仕^{くじし}の親父に、後家
 さまといふのは、どこのか部屋頭の、姉子だそふで、飛んだ獣付^{けだつく}に出会ツた。是ジャア
 あがきが付ねへ、内へ帰る迄、手前^{てめへ}の下に着ている半天でも、かしてくだアし。[ピン]手前
 もマアいゝ気の者だ。内へ行どころか、親父が起りきつて居らア。あの野郎は逆も役に
 やアたゝぬ、勘当してしまふとおゝ騒^{さわぎ}だは。先託云の済まで内へ行れるものか。[ドン]
 そんなら何でもいゝやうに頼み升ス。夫はいゝがひもじくつてならねへ。ここの内の野郎
 もけちなやつだ。独入者と見へて、隣の内へ、お鉢を預けて、出て行アがつた。どふぞ
 後生だ、なんぞ買ツて来てくだつし。[ピン]銭^{せに}が有か。[ドン]ウンにや、手前の銭^{ぜに}でよ。切餅
 がいゝぜ。序に炭団を一つ頼み升ス。[ピン]虫^{むし}のいゝやつだ。仕方がねへ、買ツて来てや
 らふが、マア託云のすむ迄、爰に寝て居さつし。式厄介はあたりまへだと、びん蔵は出て
 行。

- 1) ちょぼ一、大目小目：どちらもサイコロ博打の名称
- 2) てへてへ：大抵
- 3) 落銭：賭博で負けた方が出す金。
- 4) 公事仕：訴訟の手伝いをする役。
- 5) 獣付：獣の憑いた人間。



バクチウチメバエヒトアメ フユ ズ
博奕打芽生一雨 〃 〃 殖ル図

はるさめ ふ めばへ
春雨の降って芽生のばくち打
わるだねなれば 花も実もなし



どろふな ゑ
泥鰌の ごとくに酔ふも 玉錢を
あくたと捨て すまぬわびこと

○ 拾 廻 どうぐざいんぐわものがた
道具簗因果物語りの事

附リ ピンの一点 小目の山ト 掛合咄シ

解説：擬人化された男と女のサイコロが身の上を嘆く話。共に地方から上京したが、イカサマ賽に加工されたことを、病気持ちになったと言っているところが面白い。手に手を取って逃げようというラストは、心中ものなどによくある場面。

ピン一点 コウお前やおいらはつまらねへ身のうへだぜ。ほんに場朽打の簗のやうな、羨しひものはねへ。己も元は上方から厚紙に包まれて来もたのだ、随分四人並に勝れた男だが、何んの因果で、内会師の手にかゝり、天窓のすてつぺんから三角な錐でもまれ、其上ならず、鉛を酌こまれ、産れも付ぬ、病ひ持となり、人中へ出ても、歩行付がわるひ、杯といわれ、引た人には嫌がられ、ほん二夫をおもへばいつそ溝の中へでもおとされて仕舞てへ。**山ト** おまへもマア其やうに、一随ににおいゝだが、わたしも元は上方生れ、山トジャわひな。江戸へ下つたは四五年いぜん。京土産に買とられ、あつちこつちと鞍替²して、やつぱり因果で此家へ奉公。済と間もなく似も付ぬ、外方天窓³に摺りおとされ、砥石の責の其痛さ。堪へて今迄勤⁴たも、おまへとひとつに居たひばかり、頭痛の治らぬ苦しさを、推量⁵して下さんせナア。**ピン一点** そんならそなたも都育チ。**山ト** アイ山

トの国でムンすわひナア。ピン一点此やうに同じ奉公するといふも。山ト是もよく／＼不思議な縁。ピン一点いつそ二人でいゝかわし。山ト翌の晩御亭主が。ピン一点チョボーにゆく道すがら。ピン一点山ト袂からこつそりと、落て仕舞が上分別、おゝそふじや。「鳴もの^{なり}もの⁴⁾ ひどでら⁵⁾のかねがボン／＼。



いつてんに つぎこまれたる 玉なまり やまことば 大和言葉も すれた江戸ツ子

- 1) 一随^{いちずい}：一途と同じ。
- 2) 鞍替^{くらがえ}：芸者や遊女が勤める店を替えること。
- 3) 外法天窓^{げほうあたま}：外法頭は上部が大きく下部が小さい頭のこと。
- 4) 鳴もの^{なり}：芝居などで楽屋で演奏する効果音のこと。
- 5) ひどでら：ひどい寺、荒寺という意味と考えられる。

○ 拾壹廻 ^{てうはんざいたわむれ} 丁半 簗 戯の事
 附リ 女サイ 男サイ 仲よしの話

解説：擬人化された男と女のサイコロが語り合う物語。お半と長右衛門は菅専助の名作浄

瑠璃「^{かつらがわれんりのしがらみ}桂川連理柵」の登場人物で道ならぬ恋に落ち心中する。



いるざい うきな つぼさら とも なか はんてふ
色簀と 浮名のたつや 壺皿の 友も仲よき お半長右衛門

男サイ コウ今日の壺振りは、実正のてつか打だぜ、商売人のふる壺はこゝろもちがいゝ、
是悲元の附目に出たく成る。サア／＼お半、しつかり仕なよ、モウ墓俣^{かえるまた}もよして、くだ
り八島と出かけやう。**女サイ** マア／＼静におしよ。併 おまへと二人でこゝろ持よく出て居
たら、側の者が色賽と、気が付くだらう、ほんにしみ／＼嫌^{いや}のは、素人のぼつた壺ふ
りじやアいかねへ。幽霊壺や横明壺で、出た目を忘れて、叱られるやら、冷汗^{ひやあせ}が出升
ねへ。**男サイ** そふよ、夫だから、附目は出ねへ筈だ、何ビリ^なのぞろも気がつエゝ。併 も
ふ夜^よが明^{あけ}そふだ。商売の有る者には構わず、博奕打の方へ、盆中、吹付て仕舞ふ／＼。

- 1) 墓俣^{かえるまた}：荷重を差支える器具。「帰るのはよして」を洒落て言ったものと考えられる。
- 2) ビリ：数字の7のこと。

○ 拾貳廻 ^{さい かみまゐるひと としごろ こと}賽の神護人の年頃の事

解説：賭博でうまくいった人の話である。大黒屋槌右衛門という男は、賭博も強かったが、早く堅気になることを心掛けていたために、成功を収めたという内容。



世の中は 兎にも角にも なり瓢 浮世わたるは かるひ身かよし

ここ おへど ま なか にほんばし だいこくやつち このひとようせう しよせうぶごと
 爰に大江都の真ん中、日本橋に大黒屋榎右衛門といふ者ありしが此人幼少より、諸勝負事
 を好み、読書算用はきらひ、完に博奕打と成る。去ど此人金銭に運つよく、毎度勝利を
 得、大造に金を儲、盛りには市中の人に知られ、男をみがき、家居は立派に普請をし、
 表は櫓作りの、格子戸を建て、桁を店台所にして如鱗室の竈へ、惣銅壺を入
 れ、正面の神棚は、万燈のやう、神酒陶り、燈明皿は錫や真鍮の、詠えにて輝かし
 い、座敷は幾間もあり、床の間の様子も寸志なく、隅に三つ足の真鍮の燭台、掛物も古代
 の画、庭も閑静にして御影の石燈籠、赤松を植込み、居候七八人置きずれも彫物だら
 け、女房は姉さんごかし、どん／＼とくらしける。世の中の人にも、花の盛りあるとい
 へども、時節うつれは散ることあり序文にいふ如く、此道に老の坂といふ難所あり、此坂
 の近所ゆくとどのやうな人でも勘弁といふ事が出来、若い者の、騒ぎ廻るやぎす／＼
 するが、けんのんに成ると、今迄守つた籠の神が、逃支度するや、夫から物事、思ふや
 うには、行ず、昔のように金銭も儲からぬ也。早く此坂へかからぬうち、本道へ出て行
 が上分別也。尤此榎右衛門は、才智ある男ゆへ、早く本道へ出る事を第一にこゝろ
 がけし続後には楽隠山安穩寺へ行、境内へ別荘を構え、本宅は倅に譲り、七八人の
 居候と、教訓に伏して、手代の白鼠と成り、姉子も御新造と呼ばれしと、榎右衛門が
 物語也。此通り賽の神の守り玉ふ、博奕打でも、老の坂に至ると、神様が跡しさりな
 さる也。ましてや家業のある者、商売の片手業にして、骨折らず、金銭を沢山遣ふ杯に
 は思ひもよらぬ事ぞかし。そふ旨味は天道が糸を引ばつて置ず。欲そのころを

かへりみ おい さか なんじよ のが ほんどう ま す らくいんさん いそ このさか まよ なか
顧 て老の坂の難所を通れ本道を真っ直ぐに楽隠山へ急ぐべし。此坂にて迷へば中に、
らくいんさんあんおんじ そのよほどてまへ くるしみざんひんきうじ いつせふがい おそ
楽隠山安穩寺へゆかれず其余程手前の 苦 山 貧窮寺で一生涯くらすや恐るべし／＼。

- 1) 如鱗空：ケヤキなどに現れる魚の鱗のような木目。
- 2) 惣銅壺：かまどのうち全体を銅にしたもの。通常は土のかまどと銅の壺の併用だったので、高価なものだったと考えられる。
- 3) 白鼠：忠実な手下のこと。忠実な商家の番頭や手代などに使われる。

偽噺総目録 牟

このかいどう う あきな もの あらまし とく
○此海道にて売る 商 ひ物の荒増を説

一 のりずし まき こんにやく おでん かんざけ うなぎ どんぶりめし するめつけやき ぜうひん もちがし
海苔鮓のてつか巻○蒟蒻田楽爛酒○鰻 井 飯○鰯 附焼○上品の餅菓子○
こはんし きざみ たばこ はみがきやうじうり にしめつき べんとうや しょうがつや するこ ちやめし あんかけ とうふ ちくりん
小半紙○刻 煙草○齒磨楊枝売○煮染附 弁当屋○正月屋 汁粉○茶飯 餡 掛 豆腐○竹林
むぎめし よたか そ ば
麦飯○夜鷹蕎麦

よたか そ ば こうのう
○夜鷹蕎麦の功能

○第一腹の減りし時に二ツ喰へば奇妙に 治る○犬に吼られ取巻れた時此そばくう
うち な や どうらく やま にさんちぜつしよく この ちやめし もち ふくちう
内は鳴き止ム也。○道楽の病ひにて二三日絶 食のとき此そば二ツ三ツ用ゆれば腹中ぶ
つ／＼する ことしん ごと
事神の如し

さくしや いわくなをこのへん ついか ふだことあそ こつけい と つぎ にへん しゆかゆふけふ
○作者の 曰 尚此編に追加して札事遊びの滑稽を説く、次に二編して酒家遊興に長じて
ひやくやく どく なること しんかわ はな たておのれ ひん わ ぜうごひやくくせ こと／＼くあらわ またさんべん
百 薬の毒と成琴より新川へ花を建己レが貧する話上戸百 癖を悉く 著す、亦三編
こうしよくか せつぱいじよ きよじつ さがしていじよいんぶ み はてまで くわ おい／＼かきだ うし
には好色家の説売女の虚実を搜し貞女淫婦の身の果迄おかしみを加へ追々書出し宇斯
たち せう こ ごとしか
達に一笑を乞ふ事而り。

一天地六偽咄初編尾

韓国 IR (KIR) 1 号誕生とチャイナリスク、そしてオープンカジノ

2017 年 4 月、KIR1 号として「パラダイスシティー」が永宗島（仁川空港所在）にオープンした。カジノ大手企業「パラダイスグループ」が日本「セガサミーホールディングス」と合資した東アジアの初 IR である。カジノ施設は保有中の「仁川カジノ」免許を用いたので中央政府の許可は不要。

KIR は歴史 60 年の「ホテル賃貸型の単一施設」から「大型・複合化」したことでその意味は大きい。社会内でカジノの暗いイメージから新観光資源やエンターテインメント産業として認識を変えさせる転機になると思われる。

島内の他開発団地には、ミダンシティーのインスパイア IR（2018 年、米国 MTGA）、国際業務 2 団地の LOCZ シティー（2020 年、米国シーザースと中国プリ R&F）が企画されている。ソウルから乗車で 40 分、仁川空港からモノレールで 10 分もかからない便利さで大きい集客効果が予想される。もし、外資がプラン通り実行すれば 2020 年頃には東アジア最大の「準都市型 IR」が生まれる。

因みに、永宗島 IR については以前「ニューズレター28 号（2014）」で紹介した。韓国政府（文化観光部）がマカオやシンガポール IR の成功に影響され、今までの消極的姿勢を変えた政策をとった。外国人専用カジノを新設する外国企業に投資要件を緩和させ、経済自由区域に限定して「事前審査制」で許可した。この制度は「公募制」に改善して政府の関与度も高くなった。条件として 1000 室以上の五つ星級ホテルとコンベンションやテーマアトラクション施設、5%以内のカジノ、文化・芸術施設などの建設を義務化した。



永宗島以外には、済州島「神話歴史公園」で中国企業が参画し IR 建設に拍車をかけている。保有中の「済州ハイアットカジノ」免許を用いれば、今年 10 月に KIR2 号が生まれる。これも外国人専用であるが「済州特別法」によって地方政府が決める。しかし、島内での調整が必要条件である。

さらに現在は噂だけだが、米国「ラスベガスサンズグループ」が釜山市北港、全北道セマングム地区にオープンカジノを前提とした投資意向を見せたという。日本 IR（JIR）にも 1 兆円を投資する提案もあるという。このような巨大カジノ大手が東アジアマーケットを睨んでいる。こうした状況を踏まえて考えれば、第 2 オープンカジノへの道は 3 年前より近づいた感じだ。KIR からその道について述べたい。

まず、2016 年度の実績から現況と問題点について考える。一番目は外国人専用カジノ 16 ヶ所とオープンカジノ 1 ヶ所の二つのスタイルで運営され、オープンカジノの利用客と売上額が全体の半分以上を占めていることである。

今まで外国人専用カジノでは認知されなかった否定的社会影響が起きた。その否定的なイメージは長く（17 年以上も）IR 政策に反対する世論

| 区分 | 利用客 | 売上額 |
|---------|--------|----------|
| オープンカジノ | 317 万人 | 1,628 億円 |
| 外国人カジノ | 236 万人 | 1,277 億円 |

の背景になっている。今後このような社会状況を如何に解消するかが課題である。

二番目は、外国人利用客を首都圏・内陸圏・済州圏に分類してみると、73%・18%・9%で首都圏（ソウル 3 か所、仁川 1 ヶ所）に集中していることである。ここで仁川カジノの場合、首都圏の売り上げへの寄与度は顕著に低い。因みに、国際観光客とカジノ利用者は比例現象が見え平均 20%を占めている。しかし、仁川カジノは 5 年前の実績と変わらない。これは今まで単一型カジノ施設のために魅力を与えなかったからである。今後永宗島 IR のマーケティング戦略に注目したい。おそらくは供給過剰の問題も指摘されるだろう。

三番目は、カジノ利用客を国籍別に分類してみると、首都圏（中国 52%、日本 19%、その他 29%）、内陸圏（中国 28%、日本 36%、その他 36%）、済州圏（中国 80%、日本 8%、その他 12%）で中国人マーケットへの依存度が高いことである。因みに、2016 年度訪韓客 1724 万人のうち 46.8%（807 万人）を中国が占めている。過去の主顧客であった日本（230 万人）より 4 倍に近くまで増えた。今後 KIR の成否は中国の影響が大きいことが分かる。

ここで、日本における中国人マーケットを考えてみよう。2016 年度訪日客 2404 万人のうち中国 27%（637 万人）、韓国 21%（509 万人）、台湾 17%（417 万人）、香港 8%（184 万人）の順で韓国や台湾マーケットの規模も大きく、日本 IR（JIR）には中国の影響は少ないと思われる。因みに、仁川空港で韓国人海外旅行客を対象に調査した結果（2010 年）で回答者の 23.6%が JIR へ行きたいと答えた。訪日客 10 人のうち 2～3 人が利用することであるが、調査時点（7 年前）より訪日客が 2 倍以上増えたことと、IR に関する認識変化を考えれば、日本では「チャイナリスク」はあまり懸念することではないだろう。

現在 KIR は「チャイナリスク」に正面からぶつかり、観光産業全般に悪影響を及ぼしている。年初めから米国の THAAD（高高度防衛ミサイル）配置を巡って中国政府が「禁韓令」を下したからである。訪韓客実績（1-3 月）をみると、前年同期（651 万人）と比べ 40%減の 371 万人で旅行収支が 10 年ぶりにマイナスになった。実は、カジノ産業には 2 年前からチャイナリスクが感知された。中国政府が反腐敗政策として自国民のマカオ訪問を制限しながら韓国カジノ企業にも営業活動を自粛するよう求めた。この年、中国本土で営業していたカジノ専門募集人が長期拘束されたことがある。

筆者もチャイナリスクを4月ソウル市と済州市の繁華街で体感した。中国人の姿があまり見られなく、「急に消えた」と言えるほど街が寂しかった。よりによってこんな時に、KIR1号「パラダイスシティー」の道が陰しいことを感じさせる。こうした中国政府の対韓政策が常存することに如何に対応するかは韓国カジノや観光産業の大きな課題である。



ここで、チャイナリスクから「第2オープンカジノ」の可能性を考えたい。まず、投資国から考えてみると、中国（永宗島1、済州島1）、米国（永宗島2）、日本（永宗島1）である。いままでの中国人訪韓客は自国民の経営する所を利用する傾向が強い。これから自粛の意味で自国企業の施設を利用するのであれば、赤字が悪化していく他国の企業は韓国政府に挽回策を要求することは必至であろう。外資の立場で当然の権利であり、政府としても責任を背負うべきである。さらに、米国トランプ政府も自国企業を守るために経済や軍事政策を活用して動くと思われる。トランプ大統領だから出来ることであろう。

前述した「ラスベガスサンズグループ」の動きも気になる。前述した釜山市北港や全北道セマングム地区は、何時でも外資カジノが許可できる「経済自由特区」であるために、妙策を考えているようだ。例えば、一定保証金を払った国内人のみが利用できる「セミオープンカジノ」案の立法だ。背景には大手法律企業のロビー活動によるもので、2～3年前（朴元大統領）は青瓦台でも検討したこともあるという。

しかも、こうした動きは今も生きている中で、一つ目は閉鉱特別法で許可された「第1オープンカジノ（カンウォンランド）」の満了時期（2025年）が切迫している状況であること、二つ目はJIRのオープンから世論を変える可能性が強く見られること、三つ目は今年5月に誕生した新政権の公約で「雇用創出」という課題を実践するためには「追加財源」が切実になることである。新政権にはこうした状況下で社会内に公論化しなければならない立場に置かれると思われる。できるとしたら、その時期は1期内閣ではなく、2期になろう。

筆者は、ニューズレター28号で2020年頃には第2オープンカジノが許可されると予測した。通例からみると、社会問題になる政策は政権末期で決めたことが多かったからだ。もし朴元大統領の弾劾がない状態のまま任期内で決まったら、またも政治的スキャンダルが起きたのであろう。さらに社会内の認識をもっと悪化させたかも知れない。今考えてみれば、KIRにとっては政権が変わったことがプラス効果かも知れない。新政権の方向は、社会的問題については国民と疎通することを優先するからである。

「正しい道よりも国民と目線を合わせ、国民が欲しがることや利益になることを先に考える。」大統領就任1ヶ月後の発言である。

執筆者紹介

| | |
|--------|--|
| 美原 融 | 大阪商業大学総合経営学部 教授 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 所長 |
| 佐々木 一彰 | 東洋大学国際観光学部 准教授 |
| 松村 政樹 | 大阪商業大学総合経営学部 教授 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 副所長 |
| 高橋 浩徳 | 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 研究員 |
| 梁 亨恩 | 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 研究員 |

『IR＊ゲーミング学会ニューズレター』No.34

2017 年 6 月 30 日

編集・発行 IR＊ゲーミング学会事務局

〒577-8505

大阪府東大阪市御厨栄町 4 丁目 1 番 10 号

大阪商業大学アミューズメント産業研究所内

TEL 06-6618-4068

FAX 06-6618-4069